

## 〔報 告〕

信州大学教育システム研究開発センター語学教育カリキュラム  
研究開発分野プロジェクト [1995 (平成7) 年度～  
1997 (平成9) 年度] による試作教材試用報告

井 上 逸 兵

1. 本プロジェクトにおけるテキストの構成

教育システム研究開発センター語学教育カリキュラム研究開発分野専任教官（プロジェクト実施当時）井上逸兵，および以下のプロジェクトチームのメンバーは，1995（平成7）年度～1997（平成9）年度の本分野のプロジェクトとして大学生（特に信州大学レベルの大学生）に適した英語の教材，副教材について調査研究を行い，試作教材を製作した（概要については『信州大学教育システム研究開発センター紀要第4号』参照）。

テキストは以下のような構成である。

- ① 英語によるコミュニケーションのための時事問題討論型教材：  
『英語の鉄人養成ギブス』  
（制作担当：井上逸兵，加藤鉦三 人文学部助教授，ロバート・マーク 人文学部外国人教師）
- ② 英語によるコミュニケーションのための生活密着型教材：  
『Communicative Adventures in Britain』  
（制作担当：井上逸兵，橋本功 人文学部教授，デイビッド・ルジチカ 教育システム研究開発センター外国人教師）
- ③ コミュニケーションの前提となる異文化理解および異文化間のコミュニケーションに対する理解のための教材（副読本）：  
『会話のしくみと異文化理解』  
（制作担当：井上逸兵）

井上は平成10年度本学共通教育課程の英語においてこの教材を2ヶ月間試用した（教育学部1年，人文学部高年次）。今回の試用については時間的な制約もあり，授業においては①を中心として用いた。時事的な英語を材料に学習することで大学生にふさわしい知的な内容のコミュニケーションができることをめざしたものである。②においては会話のスク립ト練習も行なったが，今回はこのテキストに於けるやりとりを通してイギリスで生活するために必要な実際の知識を身につけることをめざし，またそのような文化的知識の増大と語学学習の効果との相関をみようとした。③は副読本として外国語でコミュニケーションをする際に前提となる文化的知識を身につけることをめざした。これについては学生に通読させ，レポートを課した。

結果としては全般に本学の学生が本プロジェクトが向上をめざすところの能力が著しく欠如していることを露呈する結果となった（おそらくこれは本学に限られたことではないと思われるが）。しかしながら、このような方向づけを与えることによって英語学習に対するより建設的な学習志向を喚起し、また有効な動機付けを行ったと判断できる学生もいた。

今回の試作教材はもとよりあらゆる英語の技能の向上を図ったものではなく、ごく限られた目的としても十分なものではないが、このような目的志向的でしかも目的を明確化した学習は効果的かつ有用であり、より組織的な英語教育プログラムの運営が必要であると思われる。

## 2. 本プロジェクトの基本構想

本プロジェクトにおける教材作成にあたって、チーム内で討議を重ねた結果、次のようなことを基本構想とした。

- (1) 挨拶や社交的会話以上の「内容」の伴ったコミュニケーションの発受信の能力の育成をめざす。
- (2) 社会や文化的な知識を伴ったコミュニケーション能力の育成をめざす。
- (3) 異文化間コミュニケーションへの理解を前提としたコミュニケーション能力の育成をめざす。
- (4) 大学生の英語学習のモチベーションとなるべく、各種英語能力試験の対策をかねたものにする。

「国際化」といわれてすでに久しい今日の社会において、外国語、特に英語の運用能力は、多くの状況において必要不可欠のものとなっている。どの言語の、どの程度の運用能力が必要か、またその言語の特にどのような面のスキルが必要かは状況や学習者の職業や生活の形態などによって異なるであろう。あるものは海外旅行に必要な程度の能力でよいかもしれないし、またあるものは英語で重要な商取引をしなければならないかもしれないし、外国語で書かれた学術専門書を読むことが必要とされるものもいるであろう。ある意味では必要とされている範囲のそしてその程度の能力さえあれば何も問題は起こらないかもしれない。我々が外国語を学習する際も、自分が一体どういう局面で（さしあたっても将来的にも）英語を使うかを考える必要があり、また基本的にはその範囲の外国語能力を身につければよいと考えられる。

さて大学生が外国語を学習する際の想定されるべき場面や状況、必要とされる能力の程度はどのようなものだろうか。同じ大学生でも置かれた状況や将来置かれると予想される状況は一樣ではないことはいうまでもない。たとえ同一大学の同一学部の学生であったとしてもそうであろう。英語のような既習外国語の場合には入学時にすでに能力の個人差がある。もちろん一人一人の学生のニーズに応えたプログラムが組まれることが理想であるが、現時点ではそれは望むべくもないので、本プロジェクトではある程度共通すると考えられる状況や運用能力の程度を想定することとした。考慮した点、前提とした点は次のようなことである。

- ・基本的な文法学習はすでに終えているか、もしくは独習すべきものである。
- ・基本的なリスニングの能力も独習によってかなりの程度に向上させることが可能であり、またそうすべきである。
- ・パターンプラクティス的なスピーキングの学習も独習によってなされるべきである。
- ・大学生に相応しい知的な議論ができるような能力を育成すべきである。
- ・留学や長期海外出張を想定した、文化的知識をともなったモデル的シュミレーション学習が必要である。
- ・非英語圏の対話者をも想定した、異文化間コミュニケーションに対する理解にもとづいた外国語学習が必要である。
- ・外国語学習にとって重要なモチベーションもしくはインセンティブを学習者がもつことが必要である。

先の4つの基本構想はこれらの考慮、もしくは前提から導き出されたものである。共通教育の英語を担当する一教官として見る限り、現在の信州大学の学生の英語の運用能力は上の最初の3つで挙げている、基本的な文法やリスニングやスピーキングのトレーニングをなしで済ませられるという段階には必ずしもない。しかし、本プロジェクトでは上に述べているように、そのようなトレーニングは基本的に独習が可能であり、またその方が効率的であると考え、それに関する教材の研究開発は今回は行わなかった。もちろん実際的にはそのような教材を適切なオリエンテーションのもとに与え、かつ設備的にも十分に学生に提供することが重要であることはいうまでもない。

また外国語学習にとって学習者の動機付けが重要であることも十分に認識されるべきであろう。ある外国の作家の作品を原書で読みたい、外国人と友達になりたい、外国語を習得しなければ仕事ができない、などの欲求もしくは必要性が外国語学習の原動力になるはずである。大学生にどのようなインセンティブを与えるのが適当であるかは、これまた個人差があり判断が難しいところであるが、本プロジェクトの特に教材①は英検、TOEFL、TOEIC等の各種英語能力試験対策を盛り込んだものである。より上位の級、高得点を目指すということ自体がモチベーションになりうるであろうし、またそれによってよりよい就職ができると考える学生にとってはさらに強いモチベーションになりうると思ったからである。

### 3. 試作教材の試用とその結果について

以下においては、平成10(1998)年10月～11月に井上逸兵担当の共通教育の外国語科目・英語の時間に行った本プロジェクトの試作教材の試用について報告する。対象は教育学部1年次(約30名)、人文学部高年次(約20名)のクラスである。

授業では教材①『英語の鉄人養成ギブス』を中心に行い、教材②『Communicative Adventures in Britain』については時間的な制約から対話のモデルを反復しながら、イギリスでの生活知識を身につけるということに今回は主眼をおいた(この教材の主目的は必ずしもそれだけでない)。また教材③の副読本『会話のしくみと異文化理解』については各自通読し、内容についてレポートする課題を与えた。

## ①『英語の鉄人養成ギブス』の試用について

まず試用前の時点での各受講者の学力、および教材①のようなたぐいの読み物への習熟度を測るため、Unit 10を20分の時間内に通読させ、テキストにある小試験（語彙、表現に関するもの）を与え、さらに以下の質問をした。内容は The Japan Times Weekly から抜粋した800語程度の新聞記事で、"The Top Court Draws a Line (画期的な玉ぐし料違憲判決)" というものである。

1. テキストすべてを読み通すことが出来たか。
2. 問題すべてを答えようとする事が出来たか。
3. テキストの内容は難しいと感じたか。
4. テキストを大筋で理解できたか。
5. テキストの内容に関心を持ったか？

解答は以下のようであった。

## &lt;教育学部&gt;

1. Yes—13% No—87%
2. Yes—22% No—78%
3. Yes—91% No—9%
4. Yes—13% No—87%
5. Yes—19% No—81%

このアンケートから、約8割の生徒にとってテキスト（UNIT10）の内容が理解困難で、関心を持っていないことがわかった。

## &lt;人文学部&gt;

1. Yes—40% No—60%
2. Yes—33% No—67%
3. Yes—100% No—0%
4. Yes—47% No—53%
5. Yes—33% No—67%

人文学部のクラスが高年次であることもあるが、この時点で若干のクラスの平均的な英語力に差が認められる。しかし、いずれのクラスにおいても程度の差はあれ、この種の内容（時事問題）の英語の理解には困難を感じ、また興味をもっていないようである。

またこの時の小試験の結果は以下の通りである。

## 平均正答率

<教育学部> 4%

<人文学部> 12%

この数値は知的な議論，時事問題に関する高度な議論をするための語彙力が両クラスとも著しく欠けていることを示していると言えよう。

その後の授業においては，Unit 1～5の5つのユニットについて20分で通読し小試験の解答を試みさせ，教官が簡単な説明を加えた後，1週間毎日1度ずつ音読をする課題を与えた。毎回の授業においては解説を加える前と加えて各自音読の課題を終えた後の理解度，難易認識度，関心度を測るため，以下の質問をした。

1. 理解できたか。
2. 難しいと感じたか。
3. 関心を持ったか。

結果は以下の通りである（授業前 [B] →授業後 [A]）。

<教育学部>

		[B]	[A]
UNIT 1	1	40%	85%
	2	37%	45%
	3	44%	46%
UNIT 2	1	36%	36%
	2	89%	76%
	3	36%	20%
UNIT 3	1	21%	20%
	2	92%	80%
	3	14%	15%
UNIT 4	1	22%	30%
	2	92%	83%
	3	16%	26%
UNIT 5	1	37%	47%
	2	74%	64%
	3	22%	23%

<人文学部>

		[B]	[A]
UNIT 1	1	25%	67%
	2	94%	89%

	3	38%→44%
UNIT 2	1	44%→29%
	2	81%→71%
	3	50%→71%
UNIT 3	1	19%→40%
	2	100%→60%
	3	19%→20%
UNIT 4	1	53%→50%
	2	80%→75%
	3	53%→50%
UNIT 5	1	13%→67%
	2	87%→78%
	3	20%→22%

まず、理解度についてであるが、授業後に必ずしもそれが高まっているわけではない。これは授業を行った教官にも責任があるが、おそらく英語そのものの次元では理解できても、内容的になお理解が困難な内容であることもその一因であろう。これは語学教育だけの問題ではなく、学生たちが日頃から時事的な問題に関心を持ち、知的な議論に耐えうるような思考をする必要があることを物語っているとも言える。それは難易を認識する度合いにもあらわれている。本テキストには日本語の抄訳も付されているが、授業を受けその抄訳を読んだ後でもその難易認識度が大きく低く（つまり、難しいと感じなく）なっていないことからわかる。

またそれはこのテキストの内容に対する関心度とも大きく関わっている。Unit 1～5までの内容は以下の通りである。

- Unit 1 Deng Xiaoping's Long Shadow (鄧小平の長い影：中国の最高指導者死去)
- Unit 2 English and the Japanese (英語と日本人)
- Unit 3 The Future of Corporate Governance (企業統制の将来：野村証券利益供与事件)
- Unit 4 Waiting for Pyongyang (北朝鮮の食糧危機と朝鮮半島和平への道)
- Unit 5 Realism and the Opposition (英労働党にみる現実主義と野党のあり方)

全体的に見て、約7割の生徒がこのテキストの内容に関心を持っていないといえる。内容的にはかなり高度で、しかも必ずしも身近な題材を扱ったものではないので、このような内容のものを読みこなしかつ関心を持つことはかなりの教養、社会に対する知識、知的能力が要求されるだろう。これを大学1、2年生に求めるのは酷とも言えるが、できれば少なくとも

これらの話題にする関心はもってほしいものである。また、関心を持つ内容であるほど、理解度が高まっていることからわかるように関心をもって学習することは非常に重要であり、学習効果を高めるものである。教師はこのような知的好奇心を喚起しつつ、学習者の語学能力を高めていく必要があると考えられるが、現在の信州大学の一般的な学生の水準を考えるとそれはなかなか容易なことではなさそうである。

## ② 『Communicative Adventures in Britain』の試用について

本テキストのねらいは英語圏（この場合はイギリス）における生活、文化に関わる知識を身につけながらそれに根ざした会話能力を育成するというものであった。しかしながら、時間的な制約のため本テキストの主旨にあった授業はできなかった。主に今回はモデル会話を暗唱しながら、イギリスでの生活についての知識を問うという演習を行ったが、十分に本テキストの目指す方向では授業は行えなかったため、その結果については本報告書では割愛する。ただ、本学学生のこの次元の能力を一端を示すものとして、次のようなロールプレイによる自発的な表現を問うテストの結果をここにあげておく。

テストはイギリスに入国するためにイギリスの空港で入国審査官と会話をしているという状況として行われた。その前の会話はつぎのようなものである（これは本テキストのChapter 1を用いた）。回答者は"Ken"の役割を担う。

Immigration Officer : Good afternoon.

Ken : Good afternoon (as he hands his passport to the officer)

Immigration Officer : Thank you. How long do you plan to be in Britain ?

Ken : About a year. Perhaps longer. I'm going to be working for a Japanese company.

Immigration Officer : Right. Have you got anything to show who you'll be working for.

Ken : Yes, I've got a letter from my company. (He hands over the letter.)

Immigration Officer : OK, that's fine. And where will you be living in London,

Ken : Well, actually, I'm not sure yet. I'm going to look for somewhere

Immigration Officer : Any dependents ?

Ken : ( )

問題は最後のところでもし自分がKenならどう言うかというものである。次のような回答があった。

### <教育学部>

E - 1 Sorry, I don't know the mean of "dependents."

E - 2 Sorry, I don't understand.

E - 3 No, I have no idea.

E - 4

- E - 5 No.
- E - 6 Thank you. For Britain, I'm stranger. Please tell me about how to use money.
- E - 7 Yes, my sister's family have lived in London, so I will visit her house first.
- E - 8 No, I don't have any dependents. So I'm going to stay at a hotel tonight.
- E - 9 I will depend on my company.
- E - 10 Oh, Thank you for your kind. Do you know the good living.
- E - 11 Oh, I'm sorry, I can't understand "dependent". Please tell me mean of your question.
- E - 12 Yes, I'll ask someone who works that company.
- E - 13
- E - 14 I will be living with wife.
- E - 15 Oh, I don't know it's mean. Please tell me what does it mean.
- E - 16 Sorry, I can't understand what you said. Would you tell me one more time ?
- E - 17 No, thank you.
- E - 18 No, I don't have any questions.
- E - 19 Sorry, I don't know your question. Please tell me what do these words mean.
- E - 20 No, I don't have any dependents. So I will go to an office that introduces an flat in London to me.
- E - 21 No, thank you.
- E - 22 No, I'll try myself.
- E - 23 I don't know.
- E - 24 No, thank you.
- E - 25 Yes, My aunt lives in Britain, so I can depend on him.
- E - 26 Yes, my father's brother lives there.
- E - 27 Yes.
- E - 28 I want to meet many different people.
- E - 29
- E - 30 Yes, a little.
- E - 31 I'm looking for my house with my company's friend.
- E - 32 No, I'm going to look alone.
- E - 33 No.

<人文学部>

- J - 1 Oh, no I have no dependents. I think what should I do. Do you know where is good place to live ?
- J - 2
- J - 3 Yes, my aunt lives in London and I'm going to visit him first.
- J - 4 Would you tell me where I can find a place to live ?



- J - 5 No, I haven't any acquaintance in this country. I will do my best.
- J - 6 Yes, my friend lives in London. So I'm going to ask him to introduce a good place.
- J - 7
- J - 8
- J - 9 No, I don't. Please tell me. I want to get your information.
- J - 10
- J - 11 Yes, my friend who will working with me will find my room.
- J - 12 Thank you. I want to live in near from my office.
- J - 13 Yes, I have some Japanese friend who live near London. I'm going to be introduced.
- J - 14 I don't have.
- J - 15 No. Then, I want you to tell me the information place.
- J - 16 Yes, I have a friend in London.
- J - 17
- J - 18 I have some colleagues in London, so I want to ask them whenever I am in trouble.
- J - 19 I want to go.
- J - 20 Ah....Britain has many beautiful town. Liverpool, Birmingham and soon. So I can find place which we live in my second hometown. And I survive. I survive! I am king! I love kingdom. HAHAHAHA!

この問題のポイントは一つに“dependents”という語を正しく理解しているかということ、もう一つはそれがわからなかった時にどう対処するかということである。大半の受講者が“dependents”（扶養家族）の語の意味を知らないことから誤答をしているようだ。しかしながら、その語の意味が分からないときに、その意味の説明を依頼する返答が少ない。わからないことや表現に出くわしたときにどう対処するかはもっとも基本的で必要不可欠なコミュニケーション能力の一つであるが、それが育っているとは必ずしも言えない。ちなみに受講者のうちイギリスに行ったことがあるものは教育学部、人文学部ともに0%で、日本以外の国にいったことがあるものは教育学部28%、人文学部37%であった。海外に行ったことのあるものの主な滞在国と目的は以下のようであった。

#### <教育学部>

- 中国 2週間 市の交換留学  
アメリカ 6日間 観光  
アメリカ 1ヶ月 観光 ホームステイ  
中国 モンゴル 3週間 山脈調査  
アメリカ 6週間 留学  
シンガポール 5日間 観光

中国 観光 NGO の活動見学  
 韓国 4日間 修学旅行  
 アメリカ 2週間 ホームステイ

<人文学部>

フランス 3週間 スキー合宿  
 中国 1週間  
 アメリカ 3週間 サマースクール  
 アメリカ 3週間 山登り  
 グアム 5日間 観光  
 アメリカ 2週間 ホームステイ

③『会話のしくみと異文化理解』の試用について

これについては学生に通読させ、レポートさせた。以下はそのレポートからの抜粋である。

1. 前述したように、今回、『会話のしくみと異文化理解』を読んで、英語を学ぶことに対する考えを変えることができた。私は、今までに学んできた英語の知識をこれから文法だけでなく、会話の面においても活用していきたいと思っているのである。
2. まず感じたことは、コミュニケーションをするときの言葉の比重が予想以上に低いということだ。
3. 外国人とコミュニケーションをとるとき、身振り手振りだけでは難しい点もあるが、言葉だけに頼ろうとするよりは、それ以外のことも使っていくことが大切なんだなと思った。
4. このテキストの中で一番印象に残ったのは、会話の中で繰り返しを使っているということです。今まで、繰り返しの機能なんて気づいたこともなかったのに、今回いろいろと納得させられたことがありました。
5. このテキストにあったことをしっかり心に留めておけば、これからの英語学習にとっても効果があると思います。
6. 相手が伝えようとする基本的な情報と意図とを理解し、こちらが伝えたい情報と意図とを伝えることができればそれでいいのだという考え方は、発音などでネイティブのように出来ないことに対して不甲斐なさを感じていた私にとって、救いとなるような考え方だった。
7. 自分が英語をネイティブのように話すことには無理があります。しかし、会話の文化的側面を理解することに関しては、自分の背の丈にあっているようにも思えます。
8. 自分も同じように、間違った外国語のコミュニケーション方法を学んでいたことに気づけたこと、冒頭でもいったように、他に生かせるノンバーバル関連のことが分かったことがよかったです。
9. このテキストを読んでつくづく感じたことは、アメリカ人のようにべらべら英語をしゃべるのには、アメリカ人が形成している社会の習慣に自分が直接ふれなければならないということである。

10. 日本人の話し方、英語文化圏の人々の話し方の違いの一部がわかってとても参考になった。これからの英語学習にプラスになるものであった。でも、文法をいくら学習しても、英語を使って本当にコミュニケーションがはかれるのだろうかと疑問に思うことがある。また、その厄介さに苛立つことが多々ある。『会話のしくみと異文化理解』はこの疑問に少なからず答えてくれた。コミュニケーション、特に会話においての問題と解答が、文化の違いを通して分かりやすく語られている。
11. 私は中学校時代から6年間以上も英語を学習してきた。ところが、英語を話せるようになった、使えるようになったと思えることがなかった。単語をいくら覚え1。「前述したように、今回、『会話のしくみと異文化理解』を読んで、英語を学ぶことに対する考えを変えることができた。私は、今までに学んできた英語の知識をこれから文法だけでなく、会話の面においても活用していきたいと思っているのである。
12. 私はこの本を読み、異文化間のコミュニケーションが困難な理由を明らかにすることが出来た。そして同時に外国語学習に対する疑念も払拭することが出来たように思える。
13. 外国語を学習するときに重要なことと、話すことにおいて重要なことには、若干の違いこそあれ、根本にあるものは同じであるということを改めて認識した。
14. 本書と私の見解の相違があった点は、外国人とのコミュニケーションにおいて言葉の比重はさほど重要ではないという点であった。単語を何とか聞き取れば、その人のいわんとしていることがぼんやりと見えてくるのではないかと思っていたからだ。確かに、本書にもあるように文化的背景によって、言葉の意味の取り方には違いがある。ひとつの単語にしても、いくつもの意味を持ち、2カ国語間における意味が完全に一致しているということは多くないかもしれない。
15. 私は文化が言語にこれほどまで影響を与えているとは知らなかった。
16. 英語における対人的配慮のパターンはこのテキストに掲載されているだけでも3パターン22項目もあり、どうすればよいのか対応方法が詳しく描かれている。これは異国人と話す上で力強い味方である。
17. 私達がコミュニケーションをとるときに相手がどういう人物なのか、どういう関係なのかを瞬時に判断し何気なく使っている表現がこのテキストでは大きく取り上げられている。
18. 私が感じたことは、コミュニケーションをとるにはただ単に言葉だけでなく、その場の雰囲気、その人の育ってきた環境を知ることがいかに大事であるか、ということである。今まで何気なく使ってきた言葉だが、このテキストを読んで気にもしなかった会話のやりとりを少しだが知ることが出来た。この、コミュニケーションの取り方は外国語を学んでいく上で必要不可欠なこともかもしれないが、日本のことを知るためにも良い資料だと思う。
19. 著書には英語での会話のしくみと、我々日本人にはなかなか想像しがたい英語においての同表現の違いが詳しく説明されてある。それだけでなく、著書にはコミュニケーションの方法、異文化を理解できるようにもなっており、そういった意味では英語と関係なしに（これは英語があまり得意でない）人にアピール出来る本ではないだろうか。
20. 著書には英語表現の多様性が書かれており、文脈や状況によっては同じ発音も別の意味になってしまうのだ。これは私にとって興味深いものであった。
21. コミュニケーションをとるには、ただ言葉さえ通じたらいいというわけではないという

ことも学ぶことが出来た。

22. 第2章で紹介されている「丁寧さのしくみ」なども異文化の人々と交流する事前に学んでおけば、役立つことが多いと思うのである。
23. この本を読んでいかに私が、コミュニケーションという単語を表面的にしか考えていなかったんだなあと思った。
24. 丁寧な言葉よりも親しみがこもっている言葉の方が相手にとって良い場合もあり、普段あまり丁寧語など使わない私としては、使い分けるのに困難する事があるなあとあらためて本を読んで思った。
25. 本書は慣習と言語、文化の関連について書かれたものであるから、異文化交流の際、こうした慣習の違いが言語の表現とそれに対する解釈の違いとして現れ、結果としてコミュニケーションの不整合を成さしめているんだ、ということを知るだけでも非常に有意義なことである。
26. 本書の唱えるような文化の違いと言語の違いについては、語学を学ぶときにおいて、知っておくべきことではないかと考える。
27. 一番印象に残ったことは、英語を用いてコミュニケーションを行う場合、会話している相手の国（地域、人種）が持つ文化的な背景や、独特な英語の使い方が大きく関わってくるということである。
28. 私はこのテキストを通して、つまり、それが間接的な表現が慣習的になっているかの理解や、聞き手の「連帯の願望」と「独立の願望」のどちらをある場面において尊重すべきかなどの丁寧さのしくみを理解することであり、また、英語と一言と言ってもアメリカ英語やイギリス英語、黒人英語などそれぞれ固有の特徴をもつ英語に分かれているから、その会話のスタイルや単語の用法などが異なることも理解していくことなのだということが分かった。
29. 結局、身にしみてよく分かったことは、自分の文化を押しつけてはならないことである。
30. この本に書かれていることは、今まであまり意識していないことだった。日常生活のなかであまりにも当たり前に行われていることなので考えたことがなく、本を読んでいて「なるほどな。」と思うことがたくさんあった。
31. 私個人の感想としては、今まで読んできた本や知識がやっと一本の線でつながったという感じがしました。この本はとてもしっかりやすかったし、おもしろかったし、私の枯れかけた知的好奇心に刺激も与えてくれました。
32. このテキストは、これだけで異文化間のコミュニケーションを円滑に行うことは不可能であろうが、経験したときに経験として生かす、身につけるのには大いに役立つように思える。
33. このテキストを通読して感じたことは、様々な言語が氾濫する中で外国人とコミュニケーションをはかるには、外国語の文法の善し悪しだけを考えるのではなく、その言語の特異性を含めた文法的背景にも同時に目を向け、理解していかなければならないということである。
34. 本文中の、'Come in.' や 'You may come in.' との違いの例などは私が中学、高校生当時の日本における文法重視の英語教育の盲点を上手くついた例文であると思う。

35. ブラウン&レビンソンの丁寧さのモデルや連帯または独立の丁寧さの方策についての数多くの具体例が挙がっていたので、それぞれの場面にあった分かりやすい説明で、どんどん読み進めることが出来た。

言語を用いてコミュニケーションするというのが、単にことばの辞書的な意味を伝えるだけでなく、様々な文化的な背景が関わっており、会話のしくみを知ることによって異文化をすることになるという主旨はある程度読んだ者に伝わっているようである。

外国語によるコミュニケーション，異文化間のコミュニケーションをしようとする際にはこのような文化的な側面の理解が重要だと考えられるが，このような副読本の講読も一つの教育方法であろう。

#### 4. ま と め

本プロジェクトにおける試作教材は文字通り試作であり，いうまでもなく十分なものとは言えないが，今回の試用によって，少なくともこの受講者たちには本プロジェクトが目指すところの英語能力が著しく欠けていることが明らかとなった。試用期間は短いものであり，これらのテキストによる効果は正しくは測れないが，担当した教官としての所見として言えば，どのようなことが求められているのかを受講者は理解したと思われる。学習者自らがどのような外国語能力を重点的に高めるべきかという目的意識を強くイメージしながら学習することが重要であると思われる。

信州大学の現状に即していうと，本プロジェクトが目指すような外国語教育をする前段階としての条件整備が急務であると思われる。前述のように外国語学習の基本的な部分はかなりの程度に独習が可能で，かつその方が効率的であり，そのようなハード面での学習者の支援が組織的にしかも量的に十分になされなくてはならない。それが独習という形で十分になされうるような環境を整えば，外国語のクラスの少人数化が可能となり，本プロジェクトが目指すような教育が可能となると考えられる。